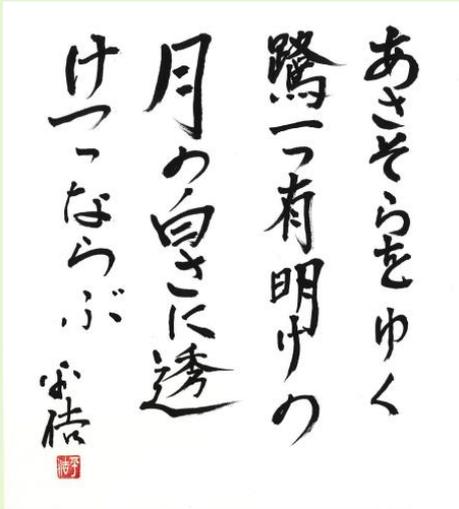


御供 平信(みとも へいきち)



1944年、群馬県に生まれる(1987年に埼玉県越谷市に転居)。叔父に短歌を習い、1963年「国民文学」に入会する。歌人の松村英一まつむらえいいちや、千代国一ちよくにいちに師事し、現在「国民文学」の発行人をつとめる。埼玉県歌人会会長、日本歌人クラブ中央幹事、現代歌人協会理事を歴任。「昭和十九年の会」結成に参加する。『河岸段丘』、『冬の稲妻』などの歌集がある。



【著者解説】

早朝の散歩に、越谷の宮内庁の鴨場と元荒川に続く川原に立つと昨夜の窓に明るかった月がやや西にかがやきを収めて残り、白鷺しらさぎが1羽西へ向かって高だかと飛んで行く。まだ登らない朝日に明るお空に張付いた月が1枚の不動の氷のように薄白く透けていないか。たおたおと行く鷺も、優美な両羽が白く透けて並んだのである。

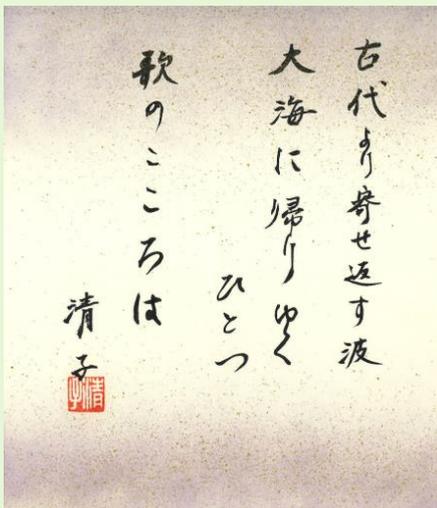
御供平信自筆色紙

「あさぞらをゆく鷺一つ有明の月の白さに透けつつならば」(No.8)

荻本 清子(おぎもと きよこ)



1937年、愛知県に生まれる(1964年に埼玉県浦和市(現・さいたま市)に転居)。1957年、「ポトナム短歌会」に入会。1967年には、歌人・前田透まえだとおるによる第三期「詩歌」復刊に参加した。前田の没後、「歌界の会」を創設する。現代歌人協会会員、日本文藝家協会会員、日本近代文学館維持会員となり、埼玉県歌人会の事務局も担当した。『河と葦』や『銀河街道』などの歌集がある。



【著者解説】

夜、就寝の前の床に横たわっていると、遠い海からの波音が聞こえてきて、寄せては戻ってゆく白波が脳裡をよぎる。一人旅の夜の薄暗で聞いたあの波音がする。古代から現代に到る歌の幾首かが浮かびあがる。わが歌の道導のように、こころの深みから思いを韻律に乗せてみた。

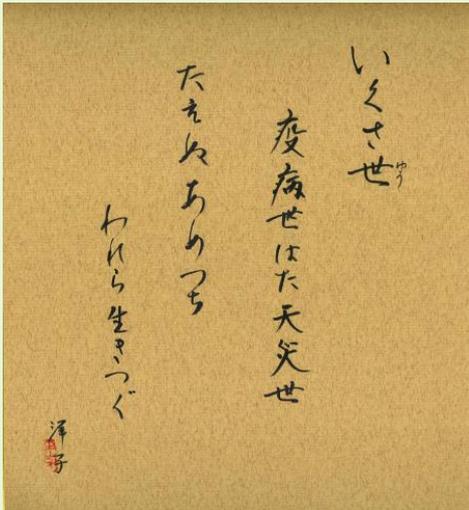
荻本清子自筆色紙

「古代より寄せ返す波大海に帰りゆくひとつ歌のころは」(No.13)

中西 洋子(なかにし ようこ)



1941年、三重県に生まれる(2000年前後に埼玉県春日部市に転居)。1973年、歌人・岡野弘彦が主宰する「人」の創刊と同時に参加。1998年、「相聞」を創刊し現在に至る。歌人、歌集研究として柳原白蓮、釈 迢空を対象としている。埼玉県歌人会理事、現代歌人協会会員、日本歌人クラブ会員をつとめる。『草流離』や『雲出川』などの歌集がある。



【著者解説】

上句の「世」は沖縄では「ゆう」、「ゆ」と発音する。ここでは音数を整えるために用いたので特に必然性はない。77年前の敗戦間際に日本で唯一の地上戦が行われたこと、今年本土復帰50年を迎えたことがなどが揺曳しているかもしれない。漢字二語の使用がしらべに障るきらいがあるが、地球上に生きるわれら人類への信頼をこめようとしたものである。

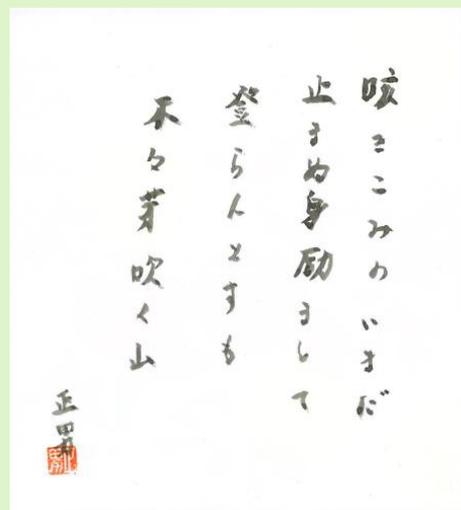
中西洋子自筆色紙
「いくさ世、疫病世はた天災世たえぬあめつちわれら生きつぐ」(No.17)

金子 正男(かねこ まさお)



1933年、埼玉県志木市に生まれる。1957年、「長風」の創刊に参加し、鈴木幸輔に師事する。現在「長風」選者・編集委員をつとめる。「盲父」50首が第7回短歌研究新人賞候補となる。埼玉県歌人会理事、現代歌人協会会員、日本歌人クラブ参与をつとめる。

『盲の父』のほか、『糸を撚る』などの歌集がある。



【著者解説】

越生の黒山三滝の傍の細い山道を登ってゆくと、両側に幹の真っすぐな杉、桧が鬱蒼と茂る。この辺りを「傘杉峠」と呼ぶようだ。この日私以外に人影はなく、森閑とした山道に熊でも出て来そうな気配であった。「咳きこみのいまだ止まぬ身」は、たまたま某社から作品依頼もあり、少し無理しての山歩きとなった。

金子正男自筆色紙
「咳きこみのいまだ止まぬ身励まして登らんとすも木々芽吹く山」(No.21)